

博士論文の要旨及び審査結果の要旨		
氏名	劉 靚	
学位	博士(文学)	
学位記番号	新大院博(文)第10号	
学位授与の日付	平成27年3月23日	
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当	
博士論文名	魯迅小説における比喩表現の研究	
論文審査委員	主査教授	橋谷 英子
	副査教授	桑原 聡
	副査准教授	猪俣 賢司
<p>博士論文の要旨</p> <p>これまで、魯迅の小説については長い研究の歴史があり、様々な角度から研究がなされてきた。その独特な口語文体の形成についても研究の蓄積がある。しかしながら、その文体の修辭的側面、特にその重要な要素である比喩の機能についての研究は限定的な段階にとどまっている。一般的に、比喩は文章表現の装飾的付属物と思われるがちであるが、魯迅小説における修辭的側面を細かに検討してゆくと、比喩が作品の基幹的な部分においてその機能を果たしていることが明らかになる。本論文は、比喩分析と物語論を方法論として、小説集『呐喊』と『彷徨』における各小説の比喩の在り方を詳細に分析し、魯迅小説において比喩が作品の中でいかなる機能を果たしているかを追究することを目的としたものである。論文の構成は以下の通りである。</p> <p>序論</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 五四時期における文体の問題 2. 魯迅小説における文体研究 3. 本論に使用する修辭理論と分類 4. 本研究の研究対象と研究目的 <p>第1章 『呐喊』における比喩表現</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「狂人日記」における隱喩の実体化 2. 「藥」における内的焦点化と比喩表現 3. 「故郷」における比喩表現と「私」による語り 4. 「阿Q正伝」における比喩表現と精神勝利法の成立 5. 「白光」における外的・内的視点と比喩表現 <p>第2章 『彷徨』における比喩表現</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「祝福」における隱喩行動と直喩の関連 		

2. 「酒楼にて」からみる隠喩的な叙述
3. 「孤独者」における隠喩による転意
4. 「傷逝」における比喩と象徴

結語

序論では、魯迅の文体研究における先行研究をまとめ、本研究における方法論を比喩と物語論とすることを述べている。第1章においては、小説集『呐喊』から五作品を取り上げて分析している。第1節では、「狂人日記」における隠喩の実体化について考察した。この小説は、主人公の食人妄想を描き、それを伝統的「家族制度と礼教の弊害」として批判したことで知られているが、この小説の特筆すべき点は、主人公の妄想が、隠喩が現実と取り違えられてゆく過程として描かれ、比喩が「狂人」の心理を描くための根幹的部分となっていることを指摘している。第2節においては、「薬」における語りの「内的焦点化」と比喩表現の関係を分析した。この作品は「異質物語外の語り手」によって語られているため、作者の批判的な視線は表面には現れないが、比喩表現の中で間接的な形で表現されている。語り手は第一人称としては直接姿を現さず、第三人称小説における比喩の中にその姿を髣髴させるというところがこの作品における比喩の特徴であることを指摘している。第3節においては、一人称小説「故郷」において、「私」の位相の変化による叙述の複雑化を考察した。すなわち、同一の表現が「私」の語りの変化により客観的描写と比喩表現の二重性を持つ。また、この作品において、語る「私」と語られる「私」という「私」の内部における分裂も見られ、「私」が「私」に批判的視線を送るという「私」の複雑化も見られる点を指摘した。第4節においては、「阿Q正伝」の「精神勝利法」と比喩表現の関係を論じている。阿Qが現実における敗北を精神的勝利に転換する「精神勝利法」について、その実態が比喩の現実転換機能を利用したレトリックに依存していることを明らかにしている。第5節においては、「白光」における「内的焦点化」と比喩機能について考察した。主人公が妄想を現実と混同し、狂気に陥ってゆく様が「内的焦点化」を用いて描かれているのであるが、妄想と隠喩がある事実を他の次元に転換することによって成立するという点で共通しているため、妄想描写は同時に隠喩表現ともみなされることを論じている。

第2章では作品集『彷徨』から四つの作品を取り上げた。第1節では、小説「祝福」において、祭祀には隠喩的祭祀と直喩的祭祀があり、比喩と祭祀が密接な関係にあることがこの作品の本質的な問題となっている点を論じた。第2節では、「酒楼にて」において、比喩に含まれるイメージと作品全体のモチーフやイメージとの関係を考察した。この作品は、一見写実的小説の観を呈しているが、比喩に含まれる喩詞のイメージのみならず、空間描写や植物や雪などの事物や人物などが相互に連想的意味関係を持って語られていることを明らかにした。第3節においては、「孤独者」における比喩の使用法を論じた。この作品の比喩表現の特徴として抽象名詞の一方が比喩的な意味を持つ両義的な使い方が挙げられる。また、語り手である登場人物の「私」と主人公とその祖母の内的連関の構図が、喩詞の縁語的な関連の中に内包されていることを、この縁語的表現の分析を通じて明らかにした。第4節においては、「傷逝」における比喩と象徴を論じた。この作品においても小説全体の比喩に使用されたイメージをはじめ、空間、植物、動物なども象徴的な意味を持つことによって相互に関連している。男性主人公の独白からなるこの作品においては、精神と肉体を中心とするイメージ連関から、男性主人公と女性主人公との神話的關係を読み取ることができることを明らかにしている。

審査結果の要旨

魯迅の小説作品を論ずる場合、その関心は魯迅の思想性あるいは社会批判的な方向に向きがちであり、魯迅の文章の文学的特色、特に修辞法に対しては注意を向けられることが少なかった。本論文は、その中でも無視されがちな魯迅の文章における比喩の機能を論じたものである。

筆者は、魯迅の小説作品に現れる比喩をほとんどすべて取り上げ、各作品の中での機能を詳細に分析している。その結果、これまでの魯迅の比喩研究には見られなかった様々な発見をしている。その第一は、「狂人日記」においては、主人公の精神異常に到る過程が隠喩の実体化の過程として描かれているという点である。隠喩は、ある事態を他の事態に変換することによって成立するが、この作品では、妄想が主人公の内面で現実化する過程が隠喩によって成立しているということを明らかにしている。さらに筆者は、この比喩による妄想の現実化が他の作品にも現れていることを明らかにしている。「阿Q正伝」において、阿Qは喧嘩に負けた現実を勝利感に変える「精神勝利法」を用いているが、この方法の核心にあるのも比喩を中心としたレトリックであることを明らかにしている。さらに「白光」においては、物語論の所謂「内的焦点化」によって主人公の内面が描かれているが、その幻想の表現は広い意味での隠喩の実体化であると論じている。このように、魯迅の小説において、比喩が主人公の妄想や幻想の心理過程の中心的存在となっていることを明らかにしたのは、筆者の功績である。第二に、「祝福」という祭りを背景に持つ作品においては、祭祀が比喩的な行為であり、「祭るに在すが如くす」という孔子の懐疑を含む直喩的祭祀と、死後の魂の存在を信ずるものとしての隠喩的祭祀の違いを指摘し、この二者の相違を魯迅が意識していたこと示すとともに、隠喩としての祭祀がこの小説の中で基幹的な役割を果たしていることを明らかにしている。このように文章の中では二次的存在として見られがちであった比喩が、魯迅の小説においては小説装置の根幹的機能を果たしていることを明らかにしているのは筆者の功績である。

このような発見以外にも、筆者は魯迅の小説における比喩の様々な特質を明らかにしている。たとえば、魯迅の小説においては、社会批判的な視線が表立って現れているわけではなく、比喩の中に暗示された形で表れていることを、「薬」や「祝福」などの分析を通じて明らかにしている。このほかにも筆者は、比喩の中に含まれているイメージが、作品の他のイメージと連想的あるいは縁語的連関を保ちながら、作品の深層にある神話的物語構造を暗示していることを明らかにしている。たとえば「傷逝」において、男性主人公は精神的なもの、天上的なものを象徴するイメージと結び付く形で描かれ、女性主人公は肉体的なもの、地上的なものを象徴するイメージと結び付けられていることを分析し、精神的なもの（天）が肉体的なもの（地）との統一を求めて失敗するというこの作品の深層に潜む神話的構造を明らかにしている。

以上のように本論文は、魯迅の小説の比喩を詳細に分析して、これまで知られていなかったそのさまざまな機能を明らかにし、魯迅小説の修辞研究に数々の発見をもたらした優れた論文であると言える。

なお、この論文は、魯迅小説の比喩研究という文学に特化した論文であるところから、博士（文学）にふさわしいものである。

以上のことから、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。